

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

# 保育者を対象としたソーシャルスキル教育のニーズ調査

著者	藤枝 静暁, 新井 邦二郎
雑誌名	川口短大紀要
巻	23
ページ	117-129
発行年	2009-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000721/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000721/</a>

# 保育者を対象とした ソーシャルスキル教育のニーズ調査

藤枝 静暁 新井邦二郎

## 1. 問題と目的

不登校やいじめ、学級崩壊など子どもの学校不応答や問題行動の増加は大きな社会問題となっている（岡村・金山・佐藤・佐藤，2009）。いじめは1980年代から、不登校は1990年代から注目されている問題である。学級崩壊は2000年あたりから注目され始めている比較的新しい問題である。学級崩壊という名称はマスコミによるものであり、文部科学省（2000）はこの問題を「学級がうまく機能しない状況」と表現している。

学校不応答に陥る原因として、子どものソーシャルスキルの不足が指摘されている。たとえば、子どもたちのソーシャルスキルの低下が、いじめ、不登校、いわゆる学級崩壊などの一因となっている（津村，2002）。また、ソーシャルスキルの低下は、対人ストレスを増幅させ、直接的にはいじめの多発などの問題を引き起こすとも指摘されている（長田，1997）。

ソーシャルスキルの定義であるが、「仲間と適切な対人関係を形成し、維持していくうえで必要な認知と行動に関する技能である。この技能は、学習によって獲得することが可能なもの」とされている。

学校不応答は、特定の子供だけでなくどの子供にも起こりうる可能性がある問題であると指摘されている（文部科学省，1990）。既に、学校教育現場では子供にソーシャルスキルを意図的に習得させ、学校不応答に対する予防のための教育が始まっている。これはソーシャルスキル教育（Social Skills Education, 以下、SSEと記述する）と呼ばれている。SSEは対人関係にかかわる具体的な知識や技能を教師が教室の中で子どもたちに教えようとする教育実践と定義されている（佐藤・相川，2006）。

定義が示すように、SSEとは極めて広い概念であり、児童にソーシャルスキルを身に付けさせるための教育活動全般を指している。藤枝・新井（2008）は、SSEを上位概念と位置づけ、個別のSST（Social Skills Training, 以下、SSTとする）とクラス全体に対するSST（Classwide Social Skills Training, 以下、CSSTとする）を下位概念と位置づけている。SST

と CSST は実施形態（少数または全員）と目的（治療的または予防的）をもって区別する。

従来、SST はソーシャルスキルが不足し、何らかの不適応を起こしている人を対象とした「治療法」として位置づけられていた（相川，2000）。また、1980年代から1990年代の半ばあたりまでは幼児を対象とした SST が主流であった。例えば、佐藤・佐藤・高山（1988）は攻撃的な幼児4名を対象として、佐藤・佐藤・相川・高山（1993）は攻撃的な幼児2名を対象として、佐藤・佐藤・高山（1993）は引っ込み思案な幼児3名を対象として SST を実施し、その効果について報告している。

その後、1990年代の後半あたりからは CSST が主流となり、治療から予防へと主たる目的が変化してきている。我が国における最初の CSST の実践は東京都豊島区立大塚台小学校（1999）によるものであった。この実践研究が発表されると、CSST は小学校および中学校現場を中心に全国的に普及が進んだ（神奈川県横浜市立高田東小学校，2009；大阪府松原市立松原第七中学校，2009 など）。また、学校不適応の予防という観点から学校教育相談部が CSST を導入する事例も増えている（東京都狛江市小学校教育研究会教育相談部，2009 など）。

CSST の導入が小学校および中学校現場へ急速に進んだ理由として、次の3点を挙げるができる。

第一の理由は、マスコミの報道によって、小学校を中心に学級崩壊が起こり、深刻な問題となっていることが世に周知されたことが挙げられる。学級崩壊とは、「教師の指導を受け入れない」、「授業が始まって教室を立ち歩く」、「私語が多い」、あるいは「集団で教室を飛び出し、いつまでたっても戻らない」、「突然奇声を発したり、物を投げる」などの行為が繰り返され、授業が成り立たなくなると、学級内での指導が困難になっている状況のことである。

文部科学省もこれを深刻な問題と受け止め、平成10・11年度に「学級経営の充実に関する調査研究」を行った。この調査研究から、学級崩壊が起こると、学級担任による一斉指導が通用しなくなる、学級集団活動が成り立たなくなるといった事態につながる危険性があること、その結果、個々の学習活動に遅れが生じたり、仲間と協同することで目標を達成しその喜びを味わう機会が失われてしまう可能性がある。

文部科学省（2000）は、この問題の原因の一つに子どもの集団生活や人間関係の未熟さの問題、つまり、ソーシャルスキルの不足を挙げている。こうした理由から、小学校を中心として学級崩壊の発生に対する予防策として SSE、特に CSST が導入されるようになった。CSST の実施が、クラス内の児童全員にソーシャルスキルを習得させ、学級崩壊の引き金となるような子どもが出てくることへの予防になるのである。

理由の2つ目として、CSST が備えている独自の特徴を挙げるができる。その特徴とは、①学級単位で実施されることから、児童全員が同じソーシャルスキルを学習することができる、

②特別な場面ではなく、日常の生活場面の中で実施することができる、③仲間同士がお互いの行動上の変化に気づきやすく、フィードバックが起こりやすい、④担任教師がトレーナーとなり、特別活動、道徳、国語といった授業時間の中で実施することができる点にある（藤枝・相川，2001；金山・日高・西本・渡辺・佐藤・佐藤，2000）。つまり、学級担任にとって少ない負担でCSSTを実施することができ、かつ、学校不適応の発生に対して高い予防効果が期待できるのである。

第三の理由として、小・中学校においてCSSTを実施する際に学習対象となるソーシャルスキル（以下、目標スキル）が明確化されており、CSSTを実施する上で必要な条件が整備されていることが挙げられる。小林・相川（1999）は、目標スキルとして「あいさつ」「自己紹介」など12のスキルを提示している。しかし、12のスキルと発達段階の関連については言及されていなかった。

この点を明らかにしたのが、藤枝・新井（2008）、中台・金山・斉藤・新見（2003）の研究である。彼らは、小学校および中学校に勤務する教師を対象に質問紙調査を行った。その結果から、教師の視点から各発達段階において子どもが習得すべきソーシャルスキルが明らかにされた。また、CSSTを実施すべき発達段階についても明らかにされている。小・中学校の教師らがCSSTを実施するのに最適と考えている時期は児童期であった。幼児期、中学校、高等学校といった発達段階においても必要であると考えていることも明らかになった。実際のところ、2000年以降において、小・中学校現場におけるCSSTの実践研究は盛んに行われており、高い効果性があったと報告されている（藤枝，2006；後藤・佐藤・高山，2001；本田・大島・新井，2009など）。

他方、先行研究から、幼児期のソーシャルスキルの習得状況がその時の社会適応だけでなく、児童期や青年期の社会適応についても影響を与えていることが指摘されている。例えば、幼児期にソーシャルスキルが優れていた子どもは、小学校低学年から青年期にかけて仲間から安定した人気を得ていると報告されている（Eisenberg, Guthrie, Murphy, Shepard, Cumberland, & Carlo, 1999）。また、幼児期のソーシャルスキルと注意力の欠如が、児童期の攻撃的かつ引っ込み思案な行動につながっており、青年期においてさえもなお注意力の低さと社会性の発達の未熟さが継続していたと指摘されている（Ladd, 1985）。

小林（1998）は、こうした先行研究による報告を踏まえた上で、幼児期は保育所や幼稚園の集団生活の中で社会的経験を通じてソーシャルスキルの基礎を形成する重要な時期であると述べている。しかしながら、幼児教育現場に目を向けると、CSSTの普及は進んでいるとは言えないのが実情である。現在のところ、幼児を対象とした我が国におけるCSSTの実践研究は佐藤・日高・後藤・渡辺（2000）だけである。このように、幼児教育現場におけるCSSTの普及が進んでいない原因の一つに、幼児期のどの時期（年少、年中、年長）において実施することが適切な

のか、また、どのようなスキルが目標スキルとして適当であるのかが明らかにされていないことが指摘されている（金山，2007）。それゆえ、幼児期のソーシャルスキルについて、上記の点を明らかにする研究が必要であると言えよう。

既述の通り、この課題に関して小学校教師と中学校教師を対象とした研究は既に行われている。だが、保育者を対象としたものは見当たらない。この点が明らかにされることによって、幼児教育現場における CSST の導入の一助になると期待できる。

ところで、昨今、幼小連携または保小連携の必要性が強く指摘されている（中央教育審議会，2005；榎沢，2005；藤枝，印刷中）。この背景には、前述のような学校不適應という問題に加えて、小1プロブレムというまた別の問題が発生し、注目されているからである。小1プロブレムとは、就学したばかりの1年生が、授業時間中座っていることができない、始業の合図であるチャイムが鳴っても教室に入らないで遊び続けている、先生の話や指示を聞かずに勝手なことをしているといった学校生活全般のルールが守れない状態のことである。この問題によって、担任の労力や時間が特定の子どもへの個別指導に費やされ、学級経営全体にネガティブな影響を与えることすらある（藤枝，2010）。こうした現状への対応策として、幼稚園や保育所で子どもたちはどのように成長しているのか、そしてそれが小学校教育にどのようにつながるのかを明らかにし、その認識を共有することが求められている（榎沢，2005）。この指摘を踏まえるならば、藤枝・新井（2008）の小学校教師 105 名を対象とした調査研究の結果の他に、幼児教育の担当者である保護者を対象とした調査研究も必要であると言えよう。

本研究の目的は、藤枝・新井（2008）の研究の発展として、幼児教育現場に勤める保育者を対象として、①SSE を幼児期のどの時期に実施するべきか、②どのようなスキルが目標スキルとして適当であるかを明らかにすることである。

## 2. 方法

調査の対象は埼玉県内の幼稚園、保育所に勤務する保育者 80 名であった。教師らは 2009 年の夏休み中に開催されたカウンセリングに関わる研修に参加していた。研修参加者は初めてカウンセリングを学ぶ方であり、その内容はカウンセリングに関する基礎知識であった。なお、研修ではソーシャルスキル、SSE に関わる内容は含まれていなかった。

研修終了後に、対象者に対して調査趣旨の説明および回答への依頼を行った。まず、実施者が対象者に対してソーシャルスキルおよび SSE に関する説明を行った。ソーシャルスキルは、「人と上手に付き合っていくために必要なコツ」と説明された。SSE は「学級単位で特別活動や道徳の時間を使い、子どもにソーシャルスキルを学習させるための教育活動である」と CSST の

内容をもって説明された。説明に具体性を持たせるために、横浜市立高田東小学校の実践事例が紹介された。説明は全部で10分少々であった。

その後、実施者が「保育者における、子どものソーシャルスキルとソーシャルスキル教育に関する意識を調査したい」という旨を説明した。また、対象者への倫理的配慮として、「アンケートの内容を他者に見せることはありません。回答は無記名で結構です。趣旨に同意して頂ける場合は、アンケートへの回答をお願いします」と依頼した。対象者はその場でアンケートに回答した。

## 2.1 SSE で取り上げたいと思うスキルについての調査

アンケート用紙には、「あなたが幼稚園教師なら幼稚園で、保育士なら保育所で子どもたちにソーシャルスキルを教えるとします。その際、子どもたちに身につけて欲しいと思うものを、下にある1～13の中から選んで下さい。いくつ選んでも結構です。選んだ番号に○をしてください。1～13の他にもあれば、その他の欄に具体的にお書きください」と教示されていた。

教示文に続き、13個のスキルが提示されていた。具体的には、①上手にあいさつをする、②上手に自己紹介をする、③上手に相手の話を聞く、④上手に質問をする、⑤遊びなどの仲間に入れてもらう、⑥遊びなどの仲間にさそう、⑦はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける、⑧相手の気持ちを考えて接する、⑨自分のしてほしいことなどを上手に頼む、⑩自分にとっていやなことやできないことを上手に断る、⑪自分の意見や考えをはっきりと伝える、⑫誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する、⑬イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする、であった。その後、「その他」として自由記述欄を設けた。

## 2.2 SSE の必要度についての調査

保育者がSSEを発達段階のどの時期に行うことをもっとも適切と考えているのかを明らかにするために、次の教示文を用いて回答を求めた。「下にあるそれぞれの発達段階において、SSEを行うことについて、どのくらい必要性を感じますか。」「まったく必要でない=1」「あまり必要でない=2」「少し必要である=3」「かなり必要である=4」「非常に必要である=5」の中から、あてはまる数字にひとつだけ○をしてください。その他にも必要であると思う時期があれば、具体的にお書きください（例：高校）。「それぞれの時期」とは、1. 1～2歳、2. 2～3歳、3. 3～4歳、4. 4～5歳、5. 5～6歳、6. 小学校、7. 中学校を指していた。最後に、「その他」として自由記述欄を設けた。

## 2.3 日頃の子どもの様子についての調査

保育者が日頃観察している子どもの様子を把握するために、自由記述欄を設けた。教示文は「日

頃のお子さんの様子から、ソーシャルスキル（仲間と関わる力、社会性）の獲得状況、家庭教育の状況などに関してご意見、気になること、心配なことなどがありましたら教えてください」であった。

### 3. 結果

研修会参加者 80 名のうち、幼稚園教師 22 名、保育所保育士 26 名から回答を得た。回収率は 60% であった。対象者の年齢は 21 歳から 63 歳（平均 43.57, SD 値 10.22, 中央値 46）、勤続年数は 1 年から 37 年（平均 17.26, SD 値 9.49, 中央値 18.50）であった。

職種別に見ると、幼稚園教師 22 名（男性 3 名、女性 19 名）の年齢は 21 歳～63 歳（平均 45.19, SD 値 11.57, 中央値 47.00）、勤続年数は 1 年から 37 年（平均 16.86, SD 値 9.57, 中央値 18.00）であった。

保育所保育士 26 名（男性 1 名、女性 25 名）の年齢は 26 歳～58 歳（平均 42.20, SD 値 8.95, 中央値 44.00）、勤続年数は 1 年から 31 年（平均 17.60, SD 値 9.61, 中央値 19.00）であった。

#### 3.1 SSE で取り上げたいと思うスキルについての調査結果

SSE で取り上げたいと思うスキルについての調査結果を Table 1 に示した。全体の回答、職種別の回答について、項目ごとに選択人数、割合（選択人数／回答者数）、被選択順位を示した。

Table 1 幼稚園教諭と保育士がソーシャルスキル教育で取り上げたいスキル

ソーシャルスキル	幼稚園 22名			保育所 26名			全体 48名			小学校教師 105名		
	人数	割合	順位	人数	割合	順位	人数	割合	順位	人数	割合	順位
1 上手にあいさつをする	20人	91%	1位	20人	77%	2位	40人	83%	1位	67人	64%	6位
2 上手に自己紹介をする	2	9	12	9	35	12	11	23	12	26	25	13
3 上手に相手の話を聞く	17	77	2	18	69	5	35	73	4	92	88	1
4 上手に質問をする	2	9	12	8	31	13	10	21	13	38	36	11
5 遊びなどの仲間に入れてもらう	17	77	2	20	77	2	37	77	2	65	62	7
6 遊びなどの仲間にさそう	11	50	8	18	69	5	29	60	7	53	50	10
7 はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける	12	55	7	15	58	9	27	56	8	68	65	5
8 相手の気持ちを考えて接する	15	68	4	20	77	2	35	73	4	87	83	2
9 自分のしてほしいことなどを上手に頼む	9	41	9	12	46	10	21	44	10	33	31	12
10 自分にとっていやなことやできないことを上手に断る	15	68	4	18	69	5	33	69	6	63	60	8
11 自分の意見や考えをはっきりと伝える	15	68	4	22	85	1	37	77	2	77	73	3
12 誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する	7	32	11	11	42	11	18	38	11	63	60	8
13 イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	9	41	9	16	62	8	25	52	9	69	66	4

参考として、藤枝・新井（2008）による小学校教師における選択順位を示した。

全体の結果を見ると、取り上げたいと選択されたスキルの第1位は「上手にあいさつをする」であった。第2位は「上手に相手の話を聞く」と「遊びなどの仲間に入れてもらう」が選択された。幼稚園教師の結果についてみると、第1位は「自分の意見や考えをはっきりと伝える」であった。第2位は「遊びなどの仲間に入れてもらう」「相手の気持ちを考えて接する」であった。保育所保育士が第1位として選択したスキルは「上手にあいさつをする」であった。第2位に選択されたのは「遊びなどの仲間に入れてもらう」と「自分の意見や考えをはっきりと伝える」であった。他方、保育者から選択数が少なかったスキルは、「上手に自己紹介をする」「上手に質問をする」であった。

「その他」の自由記述欄を見ると、幼稚園教師からは「ありがとう、ごめんなさい、どうぞ、いいよなどが言える」、「人に注意する、教えてあげるときの優しい言葉かけ」、「順番をまって、する」、「みんなの前で発表する」、「相手との関係や時と場合に応じて言葉使いを変える」、「他人の失敗を許せる」、「自分がしたことなどをじょうずに話す、自分の気持ちを素直に言える」が指摘された。

保育所保育士からは「我慢する」「ゆずる」があげられた。保育者は、これらのソーシャルスキルを目標スキルとして取り上げたいと考えていることが明らかになった。

### 3.2 SSEの必要度についての調査結果

SSEの必要度の評定平均値をFig.1に提示した。48名分の回答について、必要度の評定値を従属変数として2要因の分散分析を行った。独立変数は勤務校種（幼稚園教師、保育所保育士の2水準）と発達段階（1～2歳、2～3歳、3～4歳、4～5歳、5～6歳、小学校、中学校の7水準）であった。分析の結果、勤務校種と発達段階の有意な交互作用は見られなかった ( $F(6, 335) = 1.11, n.s.$ )。

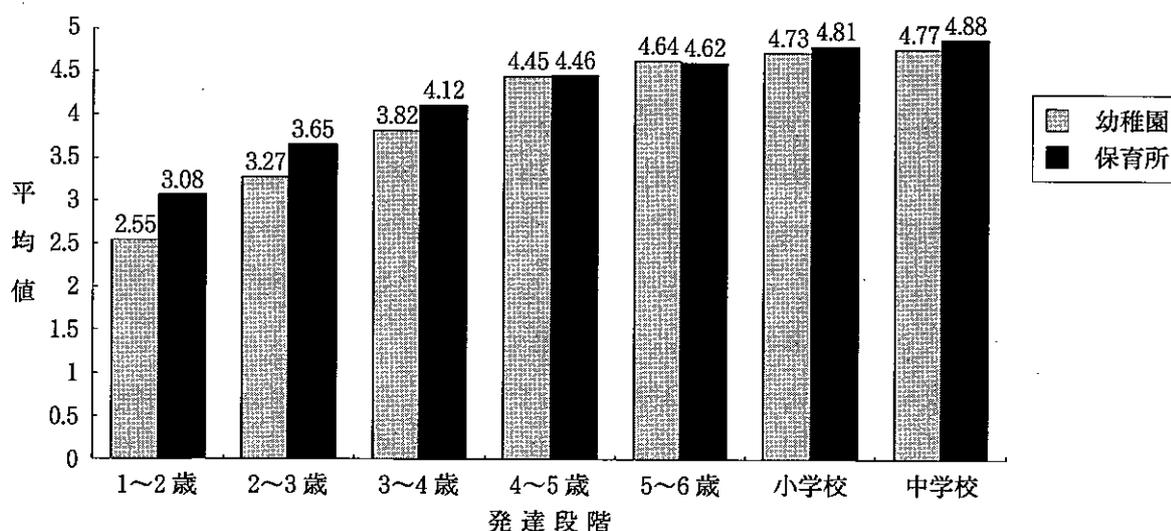


Fig.1 ソーシャルスキル教育の必要度の評定値

勤務校種では有意な主効果があり ( $F(1, 335) = 7.06, p < .01$ ), 幼稚園教師<保育所保育士であった。幼稚園教師, 保育所保育士の両方が4点以上の値であった。

発達段階の主効果も有意であった ( $F(6, 335) = 58.31, p < .01$ )。そこで, Scheffe 法による多重比較 ( $p < .01$ ) を行った結果, 1~2歳<2~3歳; 1~2歳<3~4歳; 1~2歳<4~5歳; 1~2歳<5~6歳; 1~2歳<小学校; 1~2歳<中学校; 2~3歳<3~4歳; 2~3歳<4~5歳; 2~3歳<5~6歳; 2~3歳<小学校; 2~3歳<中学校; 3~4歳<5~6歳; 3~4歳<小学校; 3~4歳<中学校であった。この結果, 保育者は1~4歳という乳時期および幼児期前半よりも, 5~6歳という小学校就学以降の発達段階においてSSEが必要であると考えていることが分かった。また, 4~5歳以降の発達段階では, いずれも4.4以上の得点であったことから, 保育者が年中以降においてSSEを実施することが最適と考えていることが明らかになった。

### 3.3 日頃の子どもの様子についての調査

30名(63%)の対象者が自由記述欄に意見・感想を記述していた。Table 2に幼稚園教師と保育所保育士ごとに意見・感想を示した。

## 4. 考察

本研究は保育者を対象としてSSEに対する認識や評価を把握することを目的として行われた。考察は本研究の結果に藤枝・新井(2008)の結果を参照して行う。

まず大きな視点として, 日頃から子どもおよびその保護者と接触している保育者は, その姿をどのように捉えているのだろうか。Table 2に示した「日頃の子どもの様子についての調査」の自由記述による意見・感想(以下, 意見・感想と略記する)の1, 3, 4, 8, 13, 16, 17, 22, 25, 26は, 子どもの社会性の欠如, コミュニケーション能力の欠如を危惧するものである。その原因として親自身の社会性の欠如, 家庭の教育力の低下を挙げている(意見・感想の1, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 14, 23, 24, 25, 27, 28, 29)。家庭の教育力の低下に対しては具体的な対策が開始され始めたところである(例えば, 藤枝・新井, 2008; 立元, 2008)。この中で藤枝・新井(2008)は, 保護者をトレーナーとして, 家庭における子どもに対するSSEを実践し, その効果を報告している。今後, こうした実践研究は増えていくと思われる。

一方で, 意見・感想の3, 4のように, 幼稚園のなかで意識的に「子どもの社会性の育成」を行っているという声もあった。また, SSEの必要度についての調査結果からも, 幼稚園教師, 保育所保育士の両方が4点以上の値であり, 両者ともSSEの必要性を強く感じていることが伺える。

しかしながら, 幼児教育現場においてSSEを実践しているという声は見られなかった。これ

Table 2 自由記述による意見・感想

## 〈幼稚園教師〉

1. 携帯電話やパソコンの普及により、人と直接関わるのが苦手な子どもや親が多い。「自分」を出すことはできても、相手の立場に立ったり、相手のことを思いやるのが難しい。情報があふれ、それにふりまわされている人も多い。逆に、知識不足のために、社会性や道徳性に欠けている人も多い。家庭教育も同じで、マニュアル通りにきっちりやりすぎている家庭とまったく構っていない家庭の極端である。自由と放任をはき違えていると思う。
2. 人と正面からぶつかりあうことを嫌がる、面倒なことは大嫌いという傾向があると思う。
3. 幼稚園に入園するまでに体験できることをしていない、獲得できているはずの社会性が身につけていない子どもが増えている。多くの子どもにとって、入園して、初めて経験することが多い。幼稚園としては、社会性の発達につながると思われる遊びをしようと努力しています。
4. 幼稚園で3~5歳児の保育（生活、遊びの中で）において、最低限、人間として生きていくルールは伝えているつもりである。保護者や子どもと心を通い合わせて大切なことを伝えていきたいと思っている。しかし、3歳までの経験がやはり大切だと思う。3歳までに迷惑をかけること、してはいけないことを教える親が少なくなった。子どもを注意すると、注意した方が悪いと言われたりする。
5. どの年齢であっても、その年齢にあったルールやマナーは家庭教育のなかで必要だと思う。家庭で伝えるべきことを家庭で伝えていない。園からそのことを親に伝えると「??」といった感じである。
6. 親同士が仲良しのため、親が子どもの遊び相手を決め、その子と遊ばせている。それが子どもにとってストレスとなり、行動に現れてくる。
7. 保護者自身の考え方、行動が子どもにそのまま現れていると思う。世の中の全体として、人間教育が必要だと思う。
8. 子ども一人ひとりの知能は高くなっているのかもしれないが、社会性がどんどん低くなっている気がします。母親を見ていると、自分の子どもさえよければよい、という傾向が強い気がする。
9. 家庭の教育力がかなり低下していると思います。親自体が未熟で、依存的な感じですが。少子化もあり、社会が子どもに甘くなっていると思います。そもそも子育ては大変なことなんです、と親に言いたいです。子どもよりも親を教育してもらいたい。
10. 共働きで経済的に豊かになり、子どもをベビーシッターに預けている家庭もある。心のケアは希薄である。
11. 家庭教育が欠如していると思うことが増えている。子どものしかり方が分からない親が増えている。たとえば、子どもに注意する時に「先生に怒られるから止めなさい」と言う親が多い。
12. 何かに付け、自分の不利や困っていることを訴えてきて、自分で解決しようとする気持ちが少なくなってきた。我慢する力も足りないと思う。
13. 子どもも親も、自分の意見をはっきり言ったり、相手の話を聞くことができなくなっていると思う。
14. 親も子どももコミュニケーションが苦手になってきている。
15. 食育ができていない家庭が増えている。お弁当のおかずは、冷凍食品ばかり。食育は家庭の努力からだと思う。

## 〈保育所保育士〉

16. 自分の気持ちを相手に伝えることはとても難しいと思います。
17. ここ何年かで、返事をしない子が増えました。こちらの声が聞こえているという状況なのに、返事をしません。名前を呼ばれても返事をしない子どもが増えているように思います。わかったのか、わからないのかの意思表示もしなくなってきました。
18. 3歳児を担当しています。年齢からして、自己中心的なのは仕方ないと思います。しかし、何でも自分のものにした、相手にすぐ手を出す、自分からしようとはしないで、やってもらうのを待つことが多い。TVのヒーローのマネが多く、遊びが発展しない。遊びの経験が少ないように思います。
19. 我慢できない子どもが多いと思う。
20. 自尊心を育てることが何よりも大切で、将来の学力、社会性に影響を与えると思う。
21. 日常生活や遊びの場面で、主体的に動けない子ども、指示待ちの子どもが目立つ。
22. TVの影響で、人をバカにしたり、大勢で笑ったりする状況が気になる。親の養育力の低下も気になる。仲間に入れて、ごめんなさいというなどのスキルを指導する必要がある。
23. 親、家庭において、生きる力、生活する知恵が足りないことが気になります。困った時に、一人で抱え込まず、誰かに相談して欲しいと思います。
24. 最近では、家庭の教育力の差が大きく、子どものマナーもその影響が大きいと思います。子ども同士のトラブルの様子も、家庭の中の大人の接し方によって違いが出ているように思います。親同士も同じ感覚の方同士が集まり、違う感覚の方との交流は少ないと思います。いろいろな方と接してもらいたい。
25. 一人っ子が多いせいか、仲間と関わる力が身につけていない子どもが多いと思います。気の合わない子を仲間はずれにしたりする様子が見られます。言葉遣いの悪さも気になります。
26. 自分の思っていることを言えないお子さんが多いと思う。「どうしたの」と声を掛けると言葉で表現できるお子さんはいいが、嫌な気持ちでイライラ、グズグズが長時間続くお子さんもいる。気持ちの切り替えをさせることが大変である。
27. 親の社会性の無さが気になります。
28. 大人への指導が必要だと思う。価値観の違いや、常識の範囲の違いが大きいと思います。
29. 今の世の中は、大人が悪い見本を見せすぎだと思います。大人が良い見本を見せなければいけないと思います。
30. バスや電車の中で、子どものマナーの悪さを見かける。自家用車が増え、バスや電車に乗る機会が減ったからでしょうか。

は、現在の幼児教育現場における SSE の認知度や実践する上で必要となる要件が十分に満たされていないことが原因であろう。

だからこそ、本研究を通して、幼児期のどの時期（年少、年中、年長）において SSE を実施することが適切なのか、また、どのようなスキルが目標スキルとして適当であるのかを明らかにする意義があるといえる。

まず、「SSE で取り上げたいと思うスキルについての調査」の結果を見ると、保育者から選択された上位 3 つのスキルは、「上手にあいさつをする」、「遊びなどの仲間に入れてもらう」、「自分の意見や考えをはっきりと伝える」であった。「上手にあいさつをする」スキルのねらいは「良好な人間関係をつくるための初めの一步である。あいさつをしたり、相手からあいさつを返されたりするとあたたかい気持ちになる」また「遊びなどの仲間に入れてもらう」スキルのねらいは、「仲間に入るには言葉をかける必要があること、状況に応じてその言葉かけを変える必要に気づき、仲間に入れてもらうための具体的な言葉を考え、実践できるようにする」さらに「自分の意見や考えをはっきりと伝える」スキルは「黙っていても、だれも自分を助けてくれない。相手の立場を尊重しながら自分の要求を主張する方法を身につける。自分も助かり、相手との人間関係も深まる」とされている（藤枝・石川・久保，1999）。つまり、自ら相手に能動的に働きかけ、相手との人間関係を良好にする上で必要なソーシャルスキルが上位に選択されていたと言える。

「SSE の必要度についての調査結果」から、保育者は 1～4 歳の時期ではなく、4 歳～中学校の時期にこそ必要と考えていることが分かった。4, 5 歳という幼児期後半の発達課題は、自分と特性の違う他者についても理解が及ぶようになること、他者の気持ちに気付くようになること、他者の気持ちに気付いた上で、自分の気持ちを相手に伝えていく方法を身につけることである（倉持，2005）。

乳児期においては一人遊び、3, 4 歳くらいまでの時期では並行遊びが主である。年中・年長や就学後になると、子どもは仲間との集団遊び、ルールのある複雑な遊び、勝ち負けを伴う遊びを展開するようになる（藤枝，2007）。また、森田（2009）はこの時期の子どもたちにおいては、仲間と相互にかかわりあい、集団とかかわることで、子どもたちが自分一人では経験できないような経験をしていると述べ、子ども相互の教育力の重要性について言及している。

幼児期後半の発達課題をクリアすること、子ども相互の教育力を引き出すうえでは、SSE に参加し先の 3 つのソーシャルスキルを習得し、仲間関係において発揮し、関係を深めていくことが不可欠であろう。

以上をまとめると、保育者は SSE は仲間との関わり合いが本格的になる幼児期後半以降の発達段階において必要であり、だからこそ、子どもが相手に能動的に働きかけていく上で必要なソー

シャルスキルを選択していたことが明らかになった。

ところで、保育者が選択した3つのソーシャルスキルについて、小学校教師はどのように認識しているのだろうか。藤枝・新井(2008)を見ると、「上手にあいさつをする」、「遊びなどの仲間に入れてもらう」、「自分の意見や考えをはっきりと伝える」については、小学校教師は順に6位、7位、3位としている。つまり、小学校の教師は、子どもにとって「上手にあいさつをする」、「遊びなどの仲間に入れてもらう」スキルは、保育者が考えているほどは高く評定していないのである。

この結果に対しては、小学校教師は児童期の子どもがこの2つのソーシャルスキルをある程度習得していると捉えていると解釈できる。保育者は子どもにとってこの2つのソーシャルスキルを必要と考えている。それゆえに、日常の保育においてこれらを意識的に指導している可能性が高い。その結果、子どもはこれらのソーシャルスキルをある程度習得し、就学後もそれが維持されていると考えられる。

藤枝・新井(2008)の結果を見ると、小学校教師は「上手に相手の話を聞く」「相手の気持ちを考えて接する」「自分の意見や考えをはっきりと伝える」を目標スキルとして上位に選択している。この3つのスキルについては、保育者はどのように認識しているのだろうか。Table 1を見ると、保育者は3つのスキルの必要性を順に4位、4位、2位と高く評定していることが分かる。

つまり、小学校教師だけではなく保育者もまた、児童期の子どもが話をしっかりと聞くこと、共感できるようになることに対する必要性を高く感じていると言える。「上手に相手の話を聞く」スキルのねらいは、「話が聴けると、自分が何をすればいいかわかるだけでなく、相手の気持ちや考えが理解できたり、相手に関心が伝えられるなど、人間関係の形成にも役に立つ」、「相手の気持ちを考えて接する」スキルのねらいは、「共感とは、相手の感情を知り、相手の立場からその場面を見て、感情を分かち合うことである。共感することで、他者とともに生き、他者を大切に育てる」である(藤枝ら, 1999)。

幼児期とは異なり、児童期には学習活動がある。学習を効率的に進める上でも、教師の話をしっかりと聞くことは不可欠である。また、児童期中期以降においては、ギャング集団やチャムグループにおける仲間との相互作用を経験しながら、仲間関係を深めたり自我の形成を行う。そこでは、相手への共感の姿勢が不可欠である。

以上の結果より、保育者が考えるSSEに対する認識や評価が明らかになった。また、小学校教師との比較から、幼児期および児童期における認識の違いも明らかになった。今後の課題は、本研究の結果を活かして、幼児教育現場におけるSSEの実践につなげていくことである。

最後に、本研究の限界を2点挙げる。一つは、対象者が保育者や教師に限定されていることである。とりわけ幼児期においては、家庭や地域による教育力が重要である。事実、保護者、祖父

母、PTA、近所の方、一般市民なども子どもと関わり、成長を支援している。彼らは教師とは異なる側面から子どもを理解し、支援しているかもしれない。したがって、彼らを対象者とした場合には、結果が異なってくる可能性もある。

現時点では、乳幼児について保護者や一般市民を対象としたSSEのニーズ調査は見あたらない。今後、対象者を広げた上で、SSEのニーズ調査を実施することが求められる。

もう一つは、本調査における対象者は夏休み中に研修会に参加し、そこで回答を求められていることが挙げられる。したがって、対象者の保育だけでなく心理学やカウンセリングに対する興味や関心はそもそも高いと判断できる。それゆえに、彼らは研修会に参加していない保育者と比べると、ソーシャルスキルや社会性の習得とその意義、発達段階と発達課題への理解が深く、その視点をもちながら保育をしたり子どもを観察しているかもしれない。結果の解釈に当たっては、こうした対象者の特徴を念頭に置く必要がある。

#### 引用文献

- 相川充 2000 人づきあいの技術社会的スキルの心理学 サイエンス社。
- 中央教育審議会答申 2005 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について。
- Eisenberg, N., Guthrie, I. K., Murphy, B., Shepard, S., Cumberland, A., & Carlo, G. 1999 Consistency and development of prosocial dispositions: A longitudinal study. *Child Development*, 70, 1360-1372.
- 榎沢良彦 2005 領域「人間関係」 榎沢良彦・入江礼子(編) 保育内容人間関係 建帛社。
- 藤枝静暁 2006 小学校における学級を対象とした社会的スキル訓練および行動リハーサル増加手続きの試み カウンセリング研究, 39, 218-228.
- 藤枝静暁 2007 こころの発達 大山正(監) 安齊順子(編) あたりまえの心理学——心理学入門—— 文化書房博文社 pp. 131-144.
- 藤枝静暁(2010) 乳・幼児期における子どもの問題 会沢信彦・安齊順子(編) 教師のたまごのための教育相談 北樹出版。
- 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, 49, 107-117.
- 藤枝静暁・新井邦二郎 2008 千葉県, 神奈川県, 東京都の小・中学校教師を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査 筑波大学発達臨床心理学研究, 19, 21-33.
- 藤枝静暁・石川芳子・久保由美子 1999 基本ソーシャルスキル12 小林正幸・相川充(編) ソーシャルスキル教育で子どもが変わる——楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化。
- 後藤吉道・佐藤正二・高山巖 2001 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果 カウンセリング研究, 34, 127-135.
- 本田真大・大島由之・新井邦二郎 2009 不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果——ターゲット・スキルの自己評定, 教師評定, 仲間評定を用いた検討—— 教育心理学研究, 57, 336-348.
- 神奈川県横浜市立高田東小学校 2009 互いのよさを認め合い, 伝え合い, 学び合う子の育成——国語科・特別活動を通して「話す・聞く」力を高める——平成20年度研究紀要。
- 金山元春 2008 幼児に対するソーシャルスキル教育プログラムの開発と効果検証 広島大学大学院教育学研究科博士学位論文。

- 金山元春・日高瞳・西本史子・渡辺朋子・佐藤正二・佐藤容子 2000 幼児に対する集団社会的スキル訓練の効果——自然場面におけるコーチングの適用と訓練の般化性——*カウンセリング研究*, 33, 196-204.
- 小林 真 1998 幼児の社会的行動における主張性と協調性の役割 風間書房.
- 小林正幸・相川充 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校 図書文化.
- 倉持清美 2005 人とかかわる力の発達 榎沢良彦・入江礼子(編) 保育内容人間関係 建帛社.
- Ladd, G. W. 1985 Documenting the effects of social skills training with children: Process and outcome assessment. In B. H. Schneider, K. H. Rubin, & J. E. Ledingham (Eds.), *Children's peer relations: Issues in assessment and intervention*. New York: Springer-Verlag. pp. 243-269.
- 文部科学省 1990 学校不適応対策調査研究協力者会議 答申.
- 文部科学省 2000 学級経営の充実に関する調査結果(平成10・11年度).
- 森田満理子 2009 保育者に求められる子どもへのまなざし——保育実践の中で子どもが教えてくれたこと—— 林信二郎・梅澤実(編) まなざしの保育理論と実践——一人ひとりへ温かいまなざし—— ななみ書房.
- 中台佐喜子・金山元春・斉藤由里・新見直子 2003 小, 中学校教諭と中学生に対する社会的スキル教育のニーズ調査 広島大学大学院教育学研究科紀要第3部(教育人間科学関連領域), 52, 267-271.
- 岡村寿代・金山元春・佐藤正二・佐藤容子 2009 幼児の集団社会的スキル訓練——訓練前の特徴に焦点をあてた効果の検討—— *行動療法研究*, 35, 233-243.
- 大阪府松原市立松原第七中学校 2009 いじめ・不登校の未然防止, 不登校生等の学校復帰をめざして人間関係学科(あいあいタイム・HRS).
- 長田雅喜 1997 対人関係能力の低下と現代社会 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 44, 1-2.
- 佐藤正二・相川充 2006 実践! ソーシャルスキル教育中学校図書文化.
- 佐藤正二・日高瞳・後藤吉道・渡辺朋子 2000 幼児に対する集団社会的スキル指導の効果 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 7, 63-72.
- 佐藤正二・佐藤容子・相川充・高山巖 1993 攻撃的な幼児の社会的スキル訓練——コーチング法の適用による訓練効果の維持—— *行動療法研究*, 19, 20-31.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1988 拒否される子どもの社会的スキル行動療法研究, 13, 126-133.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練——社会的孤立行動の修正—— *行動療法研究*, 19, 1-12.
- 立元真 2008 保護者に対するソーシャルスキルの教育 準備委員会企画シンポジウム4 ソーシャルスキルの教育, これからの課題 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, p. S17.
- 東京都狛江市小学校教育研究会教育相談部 2009 小学校3年生を対象としたソーシャルスキルトレーニングの視点を取り入れた授業研究.
- 東京都豊島区立大塚台小学校 1999 よりよい人間関係の育成——社会的スキルの視点を活かして——平成8・9年度東京都豊島区教育委員会教育研究校.
- 津村俊充 2002 対人関係能力とコミュニケーション 津村俊充(編) 子どもの対人関係能力を育てる 教職研修総合特集, 151, 10-14.

謝辞: 本研究に協力をしてくださった保育者の皆様に心よりお礼申し上げます。

(2009年12月17日提出)